

カマクラリ・
de

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

ト
ク
ウ
!

?

「妖夢ーお鍋美味しいわよ♪アナタもどう？」
「は はい！ありがとうございます 幽々子様」
今日は幽々子様がどうしても「カマクラでご飯が食べたいく！」と言って聞かないので
急遽幻想郷の辺境の地までやってきていた
お昼には着いたにもかかわらず、カマクラを張ったり、料理（大量）を作っていたりして
すでに夕方になってしまった
さっきから「おしっこしたいよ」って身体がキュンキュン訴えてきてるので
あまり汁っ気の多いものは食べたくない……

「妖夢ーこの厚揚げ お汁を吸ってとろっても美味しいわよ？」
「はいっ！美味しいです幽々子様！」
主人のすすめを断る従者がどこにいるだろうか
ーキュンツーー
厚揚げを食べている私の身体の中で、再び尿意の波が迫ってきた
私はとっさにアソコの筋肉を締める
しかし今度の波は大きく一向に収まる気配が無い

えわ

えわ

キュン

キュン

「そんなに腰を振って…どうしたの妖夢？」

「な、なんでもありませんっ！寒かっただけですっ！」

「そう…(ニヤニヤ)」

危ない危ない

無意識のうちに腰をそわそわさせてしまっていたみたいだ

そう思ってそわそわしないようにするが、意識的に動きを止めると

動きでごまかしていた尿意が一層強く感じられ

決壊しそうになる

腰を振らないよう気をつけながら

必死に括約筋に力を入れるも

力を込めれば込めるほど

逆に膀胱がギュンツ！ギュンツ！と押し返して来る

「フー…フー…！フー…フー…！」

「妖夢 大丈夫？」

「大丈夫です！妖夢は大丈夫です幽々子様！」

「…大丈夫そうね それじゃお雑炊にしましょうか」 (ニヤリ)

#12

#12



(ヒッ……!)

目の前に置かれたのは井ぶりに並々と入れられた雑炊
幽々子様はじーっと私を見つめてる

「いっ♡いただきましゅっ!」

こうなったら一気行くしか無い、そうすれば解放される

そう思い私は雑炊を食べ始めた

食べている間も相変わらず尿意は襲ってくる

それどころか、身体に入ってきた分の水分を排泄しようと

膀胱の圧力は最高潮に達しようとしていた

私が雑炊を食べている間もずっと

幽々子様は私を(正確には下腹部を)見つめていた

幽々子様の前で漏らしてしまうことを想像すると私の局部に嫌な汁が伝う

気づくと私の陰裂は汗かなにか、ヌメヌメした液体で濡れていた

その時、ちょうど雑炊を食べ終えた

私は急いでトイレに行こうとすぐさま机に手を付いて腰を上げた

「幽々子様、私ちよっとトイレ

(ふえ……っ?)

ブシッ

ブル

ブル

ゴシッ

あまりにも強烈な尿意はもはや快感で、すでに私の性感は閾値を超えていた
その瞬間フツと腰が抜けクリ○リスが一気に勃起し始めた
ぐらぐらと腰が前にせり出していきスキーン腺内に潮が充滿していくのを感じ
私は慌てて我慢しようと力を込めたがそれが絶頂のトリガーとなった
「だ、だめっ…！幽々子様のままでイツちゃうっ♡
いっっちゃ あっ あ♡」

プシッ！プシッ！プシッ！
プツシヤアアアアアアツ！

私は女の子の射精のように潮を吹くと
一気に残ったおしっこを放出した
経験したことのない快感が私の中を支配していく
絶頂が終わった後も陰部は熱い蜜を吐き出し続け
むわっとえつちな香りがあたりに撒き散らされた

グイッ

余韻に浸っていると
不意に私の足が急に広げられた

フンッ

フンッ



「ゆ 幽々子さまっ？なにを…あんっ♡」

幽々子様の舌が私の開かれた陰部を優しく舐める

「ごめんね…妖夢がおしっこ我慢してたことは気づいてたんだけど
普段真面目な妖夢の可愛いところがみたくなくなっちゃって…」

そういう幽々子様は顔が真っ赤に紅潮し

その陰部には太くてたくましい双頭 dildo が挿入されていた

「そしたら妖夢ったら潮まで吹いてイツちゃうんだもの…
そんなの見せられたら…ね…？♡」

幽々子様の細くて白い手が私の熱くなった陰部を包む

私は何か暖かいものに包まれるような感覚に覚えた
幽々子様の指が私の膣内にゆっくり挿入されていく
その細い指の腹で優しくねっとり
私のえっちなところを一つ一つ確認するように撫でると
指を引き抜き、dildo をあてがった

「挿入れるわよ…妖夢？♡」

「幽々子様っ まっ…あ ああんっ♡」

幽々子様のデイルドがニユルニユルと私の膣内に挿入されていった。入り口付近ではこそばゆいような、でも締め付けるとずっと浸りたくなるそんな快感が膣の下部ではどんどん太くなっていくものがくれる甘くじんわりとしたそんな快感が子宮口付近では幽々子様が滑り込んでくる度に意識がフツと一瞬遠のくような甘く、ジンジンと痺れるようなそんな快感が挿入される度に強まって私の身体を再び絶頂へと導いていく


「妖夢っ……好きっ♡私の妖夢っ♡」
幽々子様が好きと言う度にお互いの身体がピクンと震え切なさ絶頂への切望感が溢れはじめた
ピストンの速度が早くなり、パンパンとえっちな音を立て私のGスポットとクリ○リス、性器全体を刺激した
Gスポットが大きく膨らみ始め、ピストン運動も更に激しくなった
お互いに限界だった

私は絶頂直前の痺れの中、なんとかか足を動かし
幽々子様の腰をギュッと抱きしめた
表情が切なげなものから満たされたような笑顔へと変わり
陰部と腹部、胸と唇、できるだけすべての身体を密着させ
私たちはお互いの気持を確かめあった
急激にしあわせが全身にあふれていく中で
ビクンと二人の性器が脈を打ち、耐え難い快感が
体中を支配していった

「幽々子さまっ♡私っ♡イクっ♡いっちやうっ♡」
「私もっ♡妖夢っ♡一緒につ♡あ♡あ♡イクうっ♡」

「「あああああああああああ♡♡♡♡♡♡」
ビクンッ！ビクンッ！びくんびくん♡

二人の身体から熱い潮が飛び交う中
私と幽々子様はさらなる快感を求めて、身体を動かし始めた……



奥付

発行日：2016年12月29日（コミックマーケット91）

発行：終アザト（サークル：ようむのしお）

原作：東方Project（上海アリス幻楽団様）

印刷：株式会社カンブリ オレンジ工房ドットコム様

連絡先・SNS：pixiv（1547522）ツイッター（shoichi845）Gメール（shoichi845@gmail.com）

※18歳未満の購入、閲覧の禁止。また、無断転載、複製、アップロード等の禁止。

サークル
ようむのしお

Youmu-no-shio